

慶應義塾大学 2007 年度教員養成 GP

連続講座「社会・他者との対話」第 2 回

「ハンセン病を生きて 尊厳回復の願いと私のたたかい」

講師 森元美代治氏

2007 年 7 月 24 日

慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟 311 番教室

司会 本日は連続講座「社会・他者との対話」の第 2 講として、講師に森元美代治さんをお迎えしました。森元さんはわたしたち慶應義塾の先輩で、1962 年に法学部法律学科に御入学、66 年に卒業なさっています。お聞きするところによりますと、在学中、教職課程も履修していらしたということで、法学部の先輩であると同時に教職課程の先輩でもあるわけです。森元さんは中学校 3 年生の時にハンセン病と診断されて隔離入園となりました。ただ、慶應にお通いになっていた時は、ハンセン病から回復なさって健康な大学生活を送っていらっしゃいました。しかし就職後、病気の再発、そののち多磨全生園に再入園という御経歴を持っていらっしゃいます。

森元さんは何と言いましても、ハンセン病の患者、回復者として実名で御本を出されて、みずからの半生をカミングアウトなさった第一人者です。講演も多くなさっている先輩です。思いますと、三田の御出身の森元さんをなぜもっと早く呼びできなかったのか。本当に遅ればせながらということなのかもしれませんが、今日御講演の御快諾をいただきまして、こうして皆さんと一緒にお話を聴く機会を持てたことを、後輩として大変うれしく、ありがたく思っております。長い紹介はこれまでにしまして、早速、森元さんにお話しいただきたいと思えます。

母校での講演会にあたって

森元 今日待ちに待った日だと言っていいと思います。考えてみたら、わたしはハンセン病であることをずっと隠してこの慶應を出たわけです。卒業した時は 28 歳でした。大手銀行の入社には 25 歳の年齢制限がありましたので、都内の信用金庫に勤めました。4 年間、猛烈なサラリーマンとして仕事をしましたが、その間もずっとハンセン病であることは隠していました。「この人生、うまく渡ってやろう」と思っていたのですが、神様はなかなかそういうふうには許してくれませんでした。最大の試練と言っていいでしょうか、病気の再発で地獄を再び見ることになってしまいました。

そんなゼロからやり直しという人生の時には、まさかこんなかたちで、自分の母校である慶應でわたしが皆さんの前でお話するなんていうことは夢のまた夢。10 年前でしたら想像もできないことでした。だから、時代の流れの速さと同時に、自分たちの気持ちの変化の速さを思うと、不思議な感じがします。

今日は、わたしにとってもとても意味のある日だと思っていました。最近はおちこちで講演させていただいているので、メディアにもすっかり慣れてしまったようになっていて、あえてマスコミの方に連絡したりはしていなかったのです。でも、わが母校でこういう話をするのはまた別だと思ひまして、急いで NHK をはじめ、それなりのコネクションがある朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の三大新聞には、いちおう連絡を入れておきました。

NHKにはちょっと遅かったようで、もっと早く連絡をしてテレビでも取材していただいたらなおよかったのかもしれませんが。朝日新聞のTさんは、わたしのずっと後輩ですが慶應義塾の卒業生で、ハンセン病の患者の写真集を出していただいたりして、長い間お付き合いをさせてもらっています。今日はお忙しいのに来てくれました。毎日新聞のEさんもおいでいただきありがとうございます。Eさんも裁判の前からずっとハンセン病問題を追いかけて、とてもすばらしい記事をたくさん国民の前に書いてくださっています。そういうベテランの記者の方がいらっやっています。明日か明後日か、記事になるかわかりませんが、皆さんぜひ新聞を注目して見てください。

生い立ちとまさかの発症

いま紹介がありましたけれども、わたしは子どものころから後輩たちをかわいがるのが大好きでした。わたしたちは、奄美大島の喜界島という小さな貧しい島で育ち、昭和20年代の戦後間もないころ裸足で学校に行っていました。運動靴を手に入れたのは中学2年生のときだったと思います。初めての月星マークの運動靴のそのにおいがたまらなくて、大事に大事に使ったという思い出があります。だから、小学校時代から中学にかけては裸足でいました。

しかも、小学校高学年の時は戦時中でしたから、パンツなんかノミやシラミの糞だらけで、そんな汚い下着をつけて学校へ行っていました。それが普通だったので、自分で気がついたのは小学校5年生でした。いま言いましたように裸足で学校へ行くし、手足はみんな汚れますよね。わたしたちの小学校時代の運動といえば、まず跳び箱です。他には走り幅跳びとか、鉄棒にぶら下がるとか、一つの砂場で一つの器械があればみんなで遊べる時代でした。野球とかテニスとかバレーボールとか、そんなしゃれたスポーツはなかったです。砂遊びがほとんどでしたから、みんな泥んこ、埃だらけになって遊んでいました。でも、家に帰ってもお風呂がありません。わたしの村は100戸ぐらいの小さな貧しい農村でした。お風呂のある家は20軒に1軒ぐらいで、大半はお風呂のない家の子どもたちでしたから、みんな小川へ行って手足をきれいに洗って、そして家へ帰って夕御飯を食べて寝るという生活でした。

でも、わたしの手足は小川の水に漬けても、なかなかみんなのようにはきれいにならないのです。汚れが落ちていないので、友達によく「もっとていねいに磨け、ていねいに洗え」と言われました。でも、自分ではそんなに気にもならず、まさかもうすでにらい菌に自分の体が冒されているなんて思いませんでした。ある時、小石などで一生懸命こすっていたら、かかとに真っ赤な血が流れていました。でも、なぜか痛くありません。たくさんの赤い血が川に流れて行くのに何の痛さも感じないのです。そんな状況でも、まさかこんな病気だとは知りませんから、あまり頓着しないで小学校時代は過ごしました。

中学1年生になったばかりのころ、わたしが「ネズミ事件」と呼んでいる事件が起こりました。村に帰ってきて子どもたちと一緒にかくれんぼをして遊んでいた時、足を滑らせたせいで、かかとから5~6センチ上の脛の部分に小さなかすり傷を負ってしまいました。普通ならこんな小さな傷は放っておけば治ります。わたしの家は海が近かったから、傷があっても、海水に漬かっていると自然に治りました。そういう経験をしていたし、小さな傷だったので放ったらかしていました。

ところがなかなか治りません。治らないどころか、ほんの小さなかすり傷がだんだん丸みを帯

びてきて、やがて両足に10円玉ぐらいの大きさになりました。もう中学生ですから何だかばつが悪くて格好も悪いと、自分の両親や兄弟たちにもその傷を見られたくなくて、汚いズボンをはいて学校に行っていました。その傷がなかなか治らないもので、どうしたのだろうと思っていました。

そんなある朝、母にたたき起こされました。蚊帳を吊って寝ているところに、何か黒いものが動いているので、なにが起こっているのかを確かめようとしたのです。実は、ネズミがわたしの傷口をかじっていたらしいのです。朝早く起こされ寝ぼけているところに、ネズミだなんていうからびっくりしました。固い歯で傷口をかじられているのに、わたしはわからなかったのです。それで、これはおかしいと両親に連れられて初めて隣村のお医者さんに行きました。そこからわたしの病院通いは頻繁になりました。

病院通いと進学への挫折

当初は1週間に1回、あるいは10日に1回ぐらいだったのに、病院に通う日数もだんだん多くなって、村人にもいろいろなことを言われ出しました。だから、今度は6キロほど離れたちょっとした町の別な病院に歩いて通うようになりました。昼間は目立つので行けません。夜、日没で暗くなってから通院しました。だんだんそういうふうにならなくなってしまったのです。その間に、わたしの病気がちょっとおかしなものなんじゃないかと、村の人たちがわたしを避けるようになりました。友達も離れていくし、だんだん悔しい思いをするようになっていきました。

自分で言うのも何ですが、わたしは人付き合いもよかったし、人を避けて生きていくような少年ではなかったのです。根っから腕白でガキ大将だったし、後輩たちのこともずいぶん可愛がっていました。だから、そんなふうにならなくて友達も離れていってしまうなんて信じられなかったのです。でも、実際には自分が病院に通っているということで村人にいろいろなことを言われまして、だんだん孤独な少年になっていきました。

わたしは小学校時代、本当に勉強ができなくて、算数などでは年中立たされている子どもでした。分数の、5分の4とか3分の1とかの意味がわからないのです。劣等意識ばかり強かったのですが、中学生になって病院通いが始まると、友達も離れていって孤独な時間が多くなりました。ですからそこで、漫画があるいはもうちょっとましな伝記物などを読むようになりました。福澤諭吉の伝記などはずいぶん読みましたし、世界の偉人伝もその時期に結構読みました。それで本がだんだん好きになり、勉強もできるようになっていったのです。特に英語は中学1年生のころから5位以下にはならなかったと思います。後輩たちにも頼られていました。期末テストの時など、試験の5分前に慌ててわたしのところに飛んできて、教えて欲しいという子がいたりするぐらいでした。本当に英語に強い中学生でした。

それで高校へ行く夢をもっていました。わたしの学年は2クラスで64名でしたが、当時、進学できたのは10人ぐらいでした。1952年か53年のころです。そのころは成績がいいか、家庭がいいかのどちらかでないとなかなか高校には進めませんでした。わたしは高校へ行ける自信がありました。県立高校ですから学費も安いし、自転車で通えるところがありましたので、進学組に入って一生懸命勉強していました。しかし、中学3年生の夏休みに入ったその日に、わたしはハンセン病患者として療養所に隔離されてしまいました。

ハンセン病とわかったのは夏休みの1週間前です。いま考えれば、信じられないぐらい動揺し

ていました。わたしの家は本家でした。分家もあり、親戚がいっぱいいます。その親戚中の大人たちがみな集まってきて、美代治がかわいそうだ、かわいそうだと言っていました。なぜかわいそうなのか自分でもよくわかりませんでした。あの家のあの人もそうだったとか、あの村のあの人もそうだったとか、あるいはらい病で手足や顔もおかしくなって、療養所に連れて行かれたまま、だれ1人ふるさとに帰ってこられないなどと大人がわたしに聞かせるわけです。これはえらい病気になったのだなと思ひまして、わたしは自殺を2回も試みました。

わたしの村には自殺の名所があります。そこに村人が何人も飛び込んで死んでいます。そこで1週間に2度挑戦しました。だけど、自分自身に特に不自由があるわけではないし特にどこか痛いわけでもありません。ただ、らい病ということでみなが悲しんでいます。自分にはその悲しみがよくわからないのです。わからないけれど、大人はわたしに知りたくない情報をいろいろ知らせるわけです。わたしを慰めて言っているのだらうけれど、慰めや励ましにはなりません。誰もふるさとに帰ってこられないなどと言われてしまうと、生きた心地はしませんでした。でも、いま考えればわたしがしたのは自殺の真似ごとですね。本気になって、今の子どもたちのように簡単に死のうななんていうことは当時ありませんでしたから、真似ごとだけをしたのです。結局死にきれずに療養所に行きました。

療養所へ

奄美大島の喜界島から両親と船に乗って、和光園という療養所のあるところに連れて行かれました。行ってびっくりしました。そこは生き地獄でした。わたしは違う病気ではないかと思ったぐらい、先輩たちの後遺症はひどいものでした。最初に度肝を抜かれたのは、こんなことです。わたしは両親に囲まれて、医局長椅子の真ん中で待っていました。そうしたら向こうのほうから、髪の毛を伸ばしたおじさんがよちよちしながらわたしたちの前に来るのです。50歳そこそこのおじさんです。前を通るのかなと思ったら、わたしの真ん前で止まってしまって父と会話を交わしています。

「どこから来たの。」「喜界島から来ました。」「ああ、喜界島。喜界島の人はこちらにいっぱいいるし、この子の病気は軽いから、もうすぐ治る。お父さん、お母さん、心配ないよ」とおじさんは父を慰めているのです。その会話を聞いているうちに気がついてびっくりしたのは、おじさんの指は両手とも親指しか残っていないのです。そこに輪ゴムを付けて、杖をはさんで、よちよち歩いているわけです。足を見ると、両足にブリキの義足が見えます。両手の指は親指しかないし、足は義足でしょう。ワーンと思いました。これが第一のショックです。初めて会った自分以外のハンセン病の患者がこのおじさんでしたから、恐ろしかったですね。大ショックでした。

その後、わたしは少年寮に連れて行かれました。そこには少年が数名いました。小学校5年生の子やら、中学3年生の子もいました。だけど、大変失礼ですが、この子たちもまたみな似たりよったりでした。例えば、歳はわたしより3つも4つも上でも、まだ小学校5年生の男の子がいます。村では、ハンセン病ゆえに今でいういじめに遭って学校へ行けなかったのです。顔も眉毛はなかったし、病気が相当進行している状態でした。

彼らと一緒に食事をします。少年寮では父さんと呼ばれる28歳ぐらいの方が子どもたちの世話をしていました。どこの療養所にも少年寮、少女寮があって、世話をする人をお父さん、お母さんと呼びます。彼らは園内ではエリートです。そのお父さんも病気が重い人で、顔はしわくちゃ

でとても 28 歳には見えません。しわだらけだし、赤いこぶみみたいなものがいっぱいあって、手も完全に曲がっていて 70 歳くらいに見えました。食事でそうめんやうどんが出る時は、そのお父さんがゆでてみんなで食べます。箸を使って自分のお碗にそうめんを入れられる子は 1 人だけです。ほとんどの子がフォークで自分のお碗にそうめんを入れて食べていました。その姿を見ていると、申しわけなかったけれど、わたしはそうめんが喉を通りませんでした。10 日ほどは自分が何を食べているかわからないくらい、本当に地獄を見る思いでした。「おれ、こいつらと一生付き合うのか」という思いにとらわれていました。

両親が町から面会に来た時に母にそれを話すと、母は同情して 10 日間ほどいてくれたでしょうか。毎日、おにぎりか何かを作ってくれて、父と 3 人で丘の上にあがって、お昼だけは弁当を食べていました。いまさら後悔しても始まらないのですが、彼らには本当に失礼なことをしたなと思います。同じ病気でも軽い子と重い子ではどうしても差別があったのです。両親が帰ると 1 人で共同生活を生きなければなりません。数カ月は泣いてばかりいました。すぐにも逃げ出していつかふるさとに帰りたいという気持ちはありましたが、そんなことは許されません。

らい予防法

我慢しているうちに 1 年がたちました。1953 年、わたしが入院した次の年、らい予防法がつくられました。日本の療養所では、らい予防法という法律を国が制定しようとしていることに猛烈に反対していました。1943 年からプロミンという特効薬ができていたのに、その 10 年後に日本だけがらい予防法という法律をつくらうとして、世界の流れに逆らうようなことを日本らい学会はやったのです。

皆さんは御存知ないと思いますが、日本のらい学会のリーダーたちには慶應大学の医学部の先生がかなりいます。全部とは言わないけれど、東大の医学部か慶應の医学部が主流です。亜流は京都大学とか大阪大学です。ハンセン病の専門医を育てる学校がありましたが、いまでもハンセン病の療養所の園長さんは東大か慶應出身ですし、そういう先生たちがリーダーシップを発揮している日本らい学会が、らいを甘く見てはいけない、らい患者を隔離しないと日本はらい病国になってしまうと、1953 年にらい予防法をつくらうとしたのです。

そんな法律の制定に反対して大闘争をやっていました。彼らは厚生省の前に何日も座り込んで、消防隊に水をかけられようが何をされようが、らい予防法は認めないと頑張ったけれど、政府は法律をつくってしまいました。

しかし、そこで立てたスローガンのうち、二つだけ認められたことがあります。一つはそれまで日本にはなかった、らい菌を研究する基礎研究所の設立です。もう一つは、ハンセン病の子どもたちにも高等学校レベルの教育を与えてほしいという運動です。今は 1 人もいませんが、当時日本の療養所には小、中、高校生ぐらいの、16 歳か 17 歳ぐらいまでの子どもたちが 600 人もいました。その子どもたちも病気が治ったらいずれ社会復帰をします。憲法で教育の機会均等がうたわれているのだから、せめて高等学校をつくってほしいという運動が認められたのです。

そして 1953 年、わたしにとってなんとラッキーなことに奄美大島が日本に復帰したのです。それまでは沖縄と一緒に米軍の占領下にありましたから奄美大島はアメリカで、日本ではなかったのです。復帰とともにわたしは日本人になったので、わたしにもその高校へ行けるという権利が与えられたわけです。

権利の獲得と高校進学

沖縄にもハンセン病の療養所は二つありました。子どもが大勢いましたが、沖縄の子どもたちはまだ日本人ではないから高校を受けることはできなかったのです。ところがわたしには受験資格が与えられたわけですから、やったと思いました。奄美大島の小さな療養所にもわたしと同じぐらいの年齢の子が3人いて、3人とも高校へ行こうと机を並べて、独学で受験雑誌をあさって勉強しました。療養所には英語、数学、物理などの難しい科目の先生はいませんでした。いらしたのは、資格はないけれど国語と社会を教えているお年寄りのおじいさん先生と、ボタンかけなどの家庭科を教えるお姉さんのような先生だけでした。ですから、ほとんどのことは独学でやらざるをえなかったのです。

いよいよ、高校受験の第1次応募が全国に回ってきました。1クラス30人で4年制です。午前中の1、2時間はどうしても治療をしなければならないので、3年の全日制では無理です。そのため変則的な4年制の、昼間の定時制高校だったのです。そこに全国から1年生30名の入学を許可するという募集でしたが、対象の年齢の600名のうち応募したのは200名でした。競争率7倍です。とても無理だと思いました。奄美大島の、教育レベルの低いわれわれが内地の子に勝てっこありません。わたし以外の2人は受験数を見てさっさと諦めてしまいました。わたしは何もすることがなかったし、彼らのようにすぐ社会復帰もできなかったので、しぶとく1人で悶々と勉強していました。

そして翌々年の1955年、わたしは無事、無人島にできた療養所の学校に入学することができました。長島愛生園の一期生です。わたしたちは鹿児島から貨物列車でその高校へ行きました。隣からはブタの声が聞こえて、穀物などをいっぱい積んでいるような列車でした。1つの貨車だけわれわれ人間が乗っています。しかも“伝染病患者移送中”などという張り紙が貼られています。そんな列車でほとんど一昼夜かかって岡山まで行きました。

そういう惨めな思いをして岡山駅に着きましたが、昔は駅の構内に貨物列車のホームはありませんでした。荷物は貨車からボンボン直接地面に降るすわけです。われわれはそれに載せられていたから、汽車から飛び降りなければなりません。けれど、鹿児島の敬愛園という療養所から来た1人の同級生は小児マヒで足が普通につかえませんでした。気の毒に彼は片足で下りて転んでしまいました。それなのに、愛生園から迎えに来ている大勢の職員の誰も助けようとしません。そして、愛生園のバスが待っているところまで100メートルぐらい歩きましたが、駅の前で白衣を着ているおじさんたちが消毒を始めました。わたしたちが歩いたところを全部、消毒していくのです。100メートル向こうのホームには通勤客がいっぱい並んでおり、「なんだ、なんだ」という感じでわれわれは注目されました。そんな惨めな思いもしました。

高校生活

高校へ行ったら行ったで、また嫌なことがありました。無人島にハンセン病の療養所をつくったのですから、教師は町や村から船に乗って通ってきます。その教師たちとの関係についてです。

わたしと同じ一期生に冬敏之という同級生がいます。彼はプロレタリア文学の作家になりましたが、ハンセン病裁判が終わってしばらくしてから亡くなりました。その冬敏之が卒業文集の中でこんな文章を書いています。「わが長島愛生園高校の生徒にとって教師は異邦人である。学校の

門に入るまではネクタイをしてピチッと来る先生たちが、わが母校の門に入った途端に白衣の人
に変わる。帽子をかぶって、長靴を履いて、手袋をして、予防着を着て授業をする。学校が終わ
って門の外へ出ると、元の背広姿で帰っていく。そういう教師と生徒との関係はいったいぜんた
い同じ国の高校生と教師という間柄ではないのではないか。彼らは健常者、われらはらい菌を持
っている患者。そういうことでしかわれわれには付き合ってもらえなかった。」

彼は異邦人という言い方をしています。まことにうまい言葉だなと思いました。そういう教育
の中でわたしも4年間過ごしました。わたしは長島愛生園の4年間は決して無駄だったとは思っ
ていません。例えば生徒が教員に用事がある場合、どうしたらいいでしょうか。職員室の入口に
ブザーがありまして、その下にはクレゾール液の洗面器が置いてあります。クレゾールのにおい
がプンプンしています。そのブザーを1回押せば英語の先生、2回押せば数学の先生、3回押せば
国語の先生と書いてあります。用事のある先生とはブザーで連絡を取り合わなければなりません
でした。これは明らかに差別教育です。

ハンセン病とドクターたち

わたしが40年近くお世話になった東村山の多磨全生園という療養所は1909年につくられまし
たので、あと2年で100年です。この100年間で、全生園にかぎらずどの療養所でも、職員やそ
の家族にハンセン病がうつったという例は1人もいません。それなのに、どうしてらい学会の先
生たちはハンセン病をペストやコレラと同じぐらい恐ろしい伝染病だと国民をあおってしまった
のでしょうか。多くの国民は病気について素人だから、学会の権威の先生に恐ろしい病気だと言
われたらそのまま鵜呑みにしてしまいます。顔かたちが崩れていたから、それをいいことに先生
たちはそういうふうにはハンセン病を宣伝したのです。

たった1人だけその考え方に反対したドクターがいました。京都大学の小笠原登先生です。ハ
ンセン病裁判が起こってから脚光を浴びたすばらしいドクターです。光田健輔という調停に立っ
たドクターがいます。この光田先生は、昔、東京養育院に勤めて、らいの専門医になりました。
彼が、らい病は恐ろしい伝染病だから隔離するのが一番いいと言って、治る時代になってもカリ
スマ的に君臨していたのです。そんな時に小笠原先生は、らい病はペストやコレラのような恐ろ
しい伝染病ではないと真っ向から反対しました。いろいろ統計をとって研究をした結果、夫婦で
うつった例もないし、同じらい病同士で結婚しても生まれた子どもは1人も発病していないの
です。たまたま抵抗力のない赤ちゃんの時に、らい菌をたくさん持っている人と濃密な接触をし
た為に感染してしまうことがあっても、それ以外には発病しないのだと言っていました。それも、
プロミンができる前からです。

だから、彼は京都大学付属病院の中に特別皮膚科というのをつくって、療養所に入らなければ
ならない「ハンセン病」という診断をしないようにしました。別の神経症の名前をつけて、京都
大学付属病院にらいの患者を入院させて治療して、治ったら帰してあげるということを戦前から
やっていたのです。これはある意味でらい予防法違反者です。わたしのように慶應大学へ通学し
たり、信用金庫に勤めたりというのも、らい予防法違反です。小笠原先生はドクターとして犯罪
人です。わたしもそうです。わたしは犯罪人として慶應大学で4年間、過ごさざるをえなかった
のです。

いま光田先生がもらった文化勲章を小笠原先生に返すべきだという声が盛んに上がっています。

ハンセン病を支援するマスメディアの人たちもそう言っていますし、若いお坊さん、宗教家たちが運動しているぐらいです。そういうドクターが日本にもいたということはわたしたちの希望にもつながっていきます。

東京の大学への進学

ここで少し、わたしがなぜ大学を目指したかをお話ししておきます。その原動力になった悔しい思いをいまでも忘れません。わたしがハンセン病にかかったことを、村という村や学校の校区で知らない人がいないぐらい知られてしまって、いろいろないじめにも遭いました。本当にくやしい思いをしました。長島愛生園の高等学校を出る時、わたしのおじから就職の声がかかりました。法務省の役人になれる就職口を持ってきてくれたのですが、わたしは受けませんでした。なぜなら、就職したら楽だったかもしれないけれど、それでは満足できないと思ったのです。それでは村人を見返したことになるから、何が何でも東京の大学へ行ってやると思いました。もちろん慶應などというだけそれたことは考えていませんでしたが、とりあえず東京の大学へ行ってやろうと決めていました。わたしのクラスメート64名中、わたし以外に大学へ行ったのはたった1人だけです。小学校時代から優等生で、東京都立大学を卒業して、今はもう定年をむかえています。ある高校の先生になりました。その彼とわたしの2人だけです。

参議院選に立候補

さて、わたしはいまから6年前、民主党から参議院議員に立候補させてもらいました。その時に喜界島に帰ったのです。森元家からは、本を出版したりテレビに出演したりするわたしの活動は家の恥なのでやめろということで破門されていました。だから、参院選に出ることも、名誉回復でも何でもなくて迷惑だといって、だれも賛成してくれませんでした。

兄などはひどかったですね。わたしは出馬を反対されるのはわかっていたので、強引に選挙運動で田舎へ帰ったのです。両親のお墓参りをしたかったですし、マスコミの何人かを連れて乗り込んでいきました。お墓参りを終えて自分の家に行きました。夏の暑い時でしたから、兄がちょうど昼寝をしていたようで、すててこ姿のまま出てきました。そして、わたしの顔を見るなり「ばか野郎、帰れ、帰れ」と怒鳴り出したのです。

マスコミはそういう場면을ちゃんと撮っていて全国放送もされました。わたしは療養所の先輩たちにも怒られました。同じ療養所の仲間からは、少しやり過ぎではないかと言われました。おだてられて木に登ってしまったブタと一緒にではないかというようなことも言われたりしました。先輩たちの中からは、年を取った兄たちをこんなに苦しめるな、参議院が何か知らないけど、もう少し兄弟のことも考えてあげないとかわいそうだという声が結構あがりました。その時は、しようがないなと思いました。わたしはわたしの思いでずっと生きてきたものですから。

その晩、島に残っている20人ぐらいの同級生たちが、ホテルの小さなレストランでわたしの激励会をやってくれました。その時に1人がおもしろいことを言いました。わたしが痛くないと自慢するから、思いっきりわたしの手をかんでやったと言うのです。わたしは知覚麻痺がずっとあるから、彼に思い切りかじられても痛くなかったわけです。歯形が残ってばい菌が入って水ぶくれになってしまったので、その跡がどうなったか見せろと言います。傷跡を見せたら、今はきれいに何の跡も残っていません。

そうしたら彼がこういうことを言ったのです。たしかに自分もみんなもおまえをいじめたと思う。でも、この年になって人生は何が幸いするかわからんと思わないか。おまえがもしハンセン病でなかったら、たぶん大学なんて行ってないだろう。自分たちと同じように集団就職するか、農業を手伝うか、そうだったろう。おまえはすごいよ、今度は参議院に立候補するなんて本当にすごいことじゃないかと、彼はしみじみ話してくれました。本当にそうだと思います。人生というのは何が幸いするかわかりません。ハンセン病になったからといって、自分の人生が終わってしまったと思えば本当にそれまでです。そのほうが楽かもしれません。わたしはそれで終わらせたくないと思っていたので参議院選に出馬させてもらいました。見事に落ちたけれど、そんなことはどうでもいいのです。ただ、出られたということだけは誇りに思っています。

あのころはちょうど小泉旋風が吹いていて、小泉さんの人気が抜群だから何でもかんでも自民党に行ってしまう、最悪の参議院選挙でした。今年だったらどうなったかわからないと思います。あの時は、ほとんどの人がわたしのことを知りませんでした。でも、この10年の間に、学校関係をはじめ全国の講演会の数はもう500回を超えています。だから講演先で、以前選挙に出たことは全然知らなかったのが今度は応援するから出るようにと言われます。でも、69歳になって、明日は天国に行くかもしれないような状態です。はっきり言ってやる気もありません。体力も知力も気力もない。だから、あきらめました。5~6年前、あるいはもう少し若ければ、2度3度と挑戦したかもしれません。選挙などはそんなものらしいです。

民主党に河村たかしという名古屋のすばらしい政治家がいます。自分で「未来の総理大臣になる」と書いた旗を立てて自転車ですっと選挙をやっている有名な人です。お金をかけず自転車操業で選挙運動をしているので、ときどき政治とお金の問題に絡んだ番組に出ています。わたしが落選したとき彼からすぐに「1回2回失敗したからといってあきらめるな」と電話がありました。3回頑張ったら当選するぞ、と言うのです。そんなものかと思ったけれど、夏の参議院選挙は体力がなければとてもできません。自分でも疲労困憊しながら、40日間よくぶっ倒れないで頑張ったなと思います。もうこれだけで精一杯でした。残念ながらこうやって年を取っていくのです。でも、皆さんとこうやって出会えることになったのでよかったと思っています。

カミングアウトのきっかけ

わたしがなぜカミングアウトしたかということをお話しして結びたいと思います。今日の会のはじめに紹介してくださいましたが、『証言・日本人の過ち　ハンセン病を生きて』という本を、わたしは大学に3冊寄贈したいと思います。この本はらい予防法が廃止された1996年に発行しました。編者の藤田真一さんという方は朝日新聞の有名な医療ジャーナリストです。当時、わたしが多磨全生園の自治会長をしまして、予防法が廃止される1年前の1995年に「らい予防法廃止記念フォーラム」というシンポジウムを全生園で開催することになりました。藤田真一先生とはそこで出会いました。

ところで、その時にびっくりすることがもう一つありました。なんと慶應大学の刑法学の中谷瑾子先生がシンポジストで多磨全生園に来てくださったのです。どこか見覚えのある先生だなと思ったら、案の定、慶應義塾大学の名誉教授でいらっしゃいました。当時のお弟子さんで女子学生だった方も何人か、中谷先生のお話を聞きに全生園に来ていました。わたしが図々しく先生の教え子だと申しあげたら、中谷先生もびっくりされまして、どうしてとおっしゃいます。どうし

たもこうしたもわたしはハンセン病なのでここで隠れて生きています、とお話ししたら先生は本当に驚かれています。先生の息子さんがドクターで、厚生省の療養所のたしか課長さんになっておられました。その息子さんとも、わたしは出会っているのです。どうしてこんなに中谷家とつながるのだろうかと思いました。不思議なことがあるのですね。

さて、わたしは、最初、この本を出版できないと藤田先生に言いました。そんなことは無理だと。なぜなら、わたしだって兄弟や親戚は大事です。彼らを愛しているし、わたしがこういう本を実名で出すことで彼らにどれだけの迷惑が及ぶかはわかりきったことだから断ったのです。それに、わたしが発病したのは戦後の、プロミンができて7~8年たったあとの1952年です。もうらい病が治る時代だったから後遺症もこの程度で収まったのです。しかし戦前、戦中、戦後という時代を生き抜いた先輩たちは病状もひどいけれど、わたしよりはるかに深く苦しみ、辛酸をなめ尽くしています。そういう先輩たちをよく知っているの、わたしには本にする材料などないと思いました。そういうことも含めて、家族のことも考え、できませんと断りました。

ところが藤田真一さんはマスメディアの大御所です。どうもわたしをターゲットにしなければ他は無理だということがわかったようで、何度も何度もわたしにアタックしてくるのです。先生があまり熱情的なので、わたしも案を出しました。わたしは東村山では患者運動を結構していて、ちょっとしたレジュメなども作って小冊子にまとめてあります。それを田舎の兄や姉に読んでもらいます。そして、こういうことを基本にして体験談を本にしたいと聞いてみます。その返事次第ではやりましょう。たぶんノーだろうと思いますが、いちおうやってみますということで、兄と姉にそのパンフレットを送りました。そうしたら、兄から意外な答えが返って来たのです。びっくりしました。

ノーと言われるとばかり思っていたのに、そうではなくて、兄はこう書いてきました。おまえが予防法廃止運動で一生懸命やっていたのはわかっていた。よかったな、おまえたちもようやくこれで1人の人間として大手を振って歩けるようになったではないか。家族だって同じだ。家族だって同じように、ある意味ではおまえ以上に苦しんできた。家族にとってもこんな法律がなくなっただけでこんなうれしいことはない。頑張っているぞ、と。つまり家族からオーケーがもらえたのです。それでこの本を作りました。

カミングアウトの目的

最初にこの本が朝日新聞で紹介されて、その2~3カ月後に黒柳徹子さんの『徹子の部屋』というテレビ番組に夫婦で出演しました。もう大騒ぎです。わたしはその時、前後の見境がなくなっていたのです。家族なんてどうでもいい、こんな絶好なチャンスはないとまで思っていました。その分、家族からの反応は大変なものでした。オーケーをもらっていたはずなのに、この本を出したお陰で家族との縁は切られてしまいました。それ以来、家族との絶縁は2年ほど前まで続きました。

この本を出した目的は三つありました。一つは、ハンセン病について少しは国民に知ってもらいたいということです。皆さんもそうですし、ここにいらっしゃる教職課程センターの先生も、マスメディアの方々も、それから熱心に研究してくださっている慶應志木高校のM先生でさえ、ハンセン病のことなんてほとんど知らないという人が圧倒的に多いです。ですから、らい予防法というとんでもない法律でがんじがらめにされたわれわれのことを知ってもらうために、この本

で自分の体験談をぶつけてみたのです。多くの国民にハンセン病とはどういうものをわかってもらう。これが第一の目的です。

第二は、家族との関係のためです。ほとんどの人が、病気などもう40年も50年も前に治っていて、ただ後遺症があるだけです。そして裁判にも勝ったのに、死ぬまでふるさとに帰れない、いや死んでも帰れないのです。どこからこんな間違いが起こったのだろう。こういうことを含めて、家族もいわれのない差別や偏見に苦しんできました。苦しむ理由はないはずです。家族はハンセン病ではないのに、なぜ家族まで同じように、あるいは本人以上に苦しまなければならないのでしょうか、離婚しなければならないのでしょうか。そんな理不尽なことに黙っていられます。わたしは家族も一緒にわたしとこの本を通して戦ってほしいと思いました。少なくともいわれのない偏見や差別と真正面から向き合って乗り越えてほしい、これが第二の目的です。

第三は、学生時代の友人たちとの繋がりです。わたしが慶應大学に籍を置いていた4年間は、わたしにとっては、いまでもそうですが、皆さんとは違うかけがえのない青春時代でした。ハンセン病を隠しながらここで4年間過ごしたことは、言葉で言えないくらいかけがえのないものでした。でも、残念ながらハンセン病が再発して、26年間療養所にとじこもって、もう死んだも同然でした。大学時代の友人たちとは一切通信しませんでした。彼らから年賀状は来ます。北海道や英国あたりからも、出世してここにいるのだという手紙が来ます。10年や20年経つとどこそこの会社の重役になったというような便りが届くけれど、わたしは返事ができませんでした。26年間、浦島太郎になりきっていました。自分がいまでも療養所にいることで、肉体的にも恥ずかしいけれど、精神的にもまいっていました。みっともなく、彼らと会うのは惨めだと思って自分から隔絶して壁を作っていました。

そういう状況でらい予防法の廃止運動をやっていくうちに、気持ちが少しずつ変わってきました。何とか世直しの役に立たないかと思い始めたのです。そして、友人たちとの繋がりを期待して本を出版しました。クラスメートが70人いて、お世話になった内池慶四郎先生のゼミの仲間も600人ぐらいいるけれど、たった一人がいい。この本を読んでくれて、わたしがハンセン病で大変だったのだと思って手紙なり電話なりをくれて、わたしと学生時代の思い出話を語る友人はいないかと考えました。不安が圧倒的、期待はほんのわずかだけで、大半は無理だろうなと思いながら気持ちをこの本にぶつけてみました。

カミングアウトをしてから

1996年10月2日の朝日新聞に、写真入りでこの本が紹介されました。そうしたら、大森にいたわたしのクラスメートのお母さんが彼にその新聞を見せてくれたのです。実はわたしは学生時代、病気を隠して、そのクラスメートの家へ年中遊びに行っていました。泊まったこともあります。そして彼はわたしを探してくれていたのです。ですからお母さんは、喜界島出身で慶應大学という経歴からわたしではないかと彼に言ってくれたわけです。彼はすぐに、わたしの無二の親友だったS君にも、わたしの所在を教える電話をしてくれました。そして、この新聞のことをクラスメートのみんなにも回してくれたのです。

わたしは出版のお祝いを全生園でしようと思っていました。10月2日にこの本が全国に紹介されて、1週間後の10月10日にS君からわたしに電話がありました。10月10日は当時、体育の日で祝日でした。厚生省のお世話になった先生方、外部の先生方、園内の人たちみんなからも祝っ

てほしいと思って、お休みの日に全生園のコミュニティセンターで出版のお祝い会をやることにしたのです。1週間前からあいさつも一生懸命考えて原稿に起こしていました。そのお祝いの日の午後2時ごろでした。ようやく原稿を書き終えて、そろそろ家に帰ってネクタイでもして会場に向かおうとした瞬間でした。わたしのデスクの電話が鳴ったのです。「森元、おれだよ、わかるか。」その「おれ」ですぐわかりました。「Sか。」「そうだ。」2人はしばらく無言でした。彼が電話の向こうで泣いているのが、わたしにはわかりました。

S君たちは、わたしが外国に行ったのだとか、大阪あたりで何かやっているとか、死んでしまったとか、いろいろ噂はあっても消息がわからず、尋ね人で探そうとしたと教えてくれました。わたしは26年間、東村山にいたわけですが、S君の母親は目と鼻の先の練馬に住んでいたものですから、わたしに早く会いたいと言っていると伝えてくれました。誰よりも先におふくろに会ってくれないか、と。そして、ハンセン病だからといって隠れて生きることはないじゃないか、みずくさいと言ってくれました。

こんな想像もしないことが起こるのですね。神様のいたずらにしてはあまりにもドラマチックです。出版会のその日です。その日のぎりぎりのところですよ。オーバーに言えば、そこで電話がなかったら、今のわたしはないと思っています。出版の挨拶はアドリブでやるしかないと思い、原稿を全部やめてしまいました。お祝いの日の今日、クラスメートでゼミの仲間でもある彼から電話があって、こんなに嬉しいことはない、わたしはいま天国にいるようです、と泣きながら20分ほど挨拶をしました。

それからS君のお母さんに会いました。1カ月後の11月には、内池先生のゼミの総会が目黒の雅叙園であるのでわたしにも出席して欲しいと言われました。わたしはうれしくて、S君がゼミの会長をしてもいたので、喜んで行こう、妻も連れていくと返事をしました。ただし、内池ゼミの総会でみんなも久しぶりに会うのだから、わたしの話はほどほどにしてくれとS君には頼んでおきました。

当日は現役の学生も相当いましたし、OBやOGもたくさん出席していました。わたしのために初めて出席したという方もいました。内池先生が家族全員、配偶者まで連れてきてわたしのカミングアウトを祝ってくれました。その内池教授がこう言ってくれました。600名を超えるゼミ員の一人ひとりについて、だいたいはどういうことをしているかわかっていた。ただ1匹だけ、どこへ行ったかわからなかった。その迷える小羊、森元が今夜こうして自分の胸に飛び込んでくれた。これは教授冥利に尽きる、と先生は泣きながらみんなの前で話をされました。

みんながわたしに、舞台の上に上がれ上がれと言うので、わたしが涙しながら上がっていくと、長身の内池先生がよかったなとわたしを抱きしめてくれます。震える心で、先生とわたしは言葉では言えないくらい感動しました。それがわたしの、初めてのカミングアウトでした。広くカミングアウトする最大の力になったのはこれです。わたしはあの晩、自分が至らないことを後悔しました。たぶん慶應の卒業生はエリート意識を持っていて、ハンセン病のわたしのことなんか嫌がって、怖がって、もしかしたらだれ一人、手紙も電話もよこさないのではないかと。こんなふうに思っていたのですが、そうではありませんでした。まったく逆でした。

この集会で1期生の仲間の1人が、福澤諭吉が実学と言ったのはこういうことではないか、と言いました。勉強して、偉くなって、出世すればいいというものではないと。たぶん彼は思いつきで言ったのですが、わたしもそういうことかなとわかりました。実際の学問とは何か、世

の中で生きる学問とは何か、こういうことを福澤先生は教えていかれたのではないのでしょうか。わたしは逆に、ハンセン病のわたしの存在なんてエリート意識がある慶應大学の恥になると思っていました。かつての日本、近代国家日本でも、昭和を過ぎた今日に至ってもハンセン病の患者は日本国家の恥ととらえていました。

わたしは慶應大学の恥、森元家の恥、喜界島の恥、奄美大島の恥なのだと、そういう恥の思いの中でずっと生きてきたのです。けれど、これは実は自意識過剰、被害妄想だったと今は思っています。現に、わたしのゼミの仲間やクラスメートがわたしのためにどれだけ一生懸命応援してくれているのでしょうか。ついこの間も、わたしは仲のよかったクラスメート 11 名で北海道の旭川に行ってきたばかりです。

わたしは子どものころからこの病気ゆえに、人の心を読むのが結構長けているのです。口では笑っているけれど、心でどう思っているのか。大きなはずれもあるかもしれませんが、結構そんなふうに見えています。参議院選挙に出た時に、名古屋で河村たかし先生がわたしの応援に来てくれました。今日は森元さんの応援に来たのだから森元さんと握手してくれと河村先生が言ってくれても、みなさん、先生には抱きつくけれど、わたしが握手しようとする手と手を引っ込められてしまいます。東京や沖縄でも 2 度も 3 度もそんな目に遭いました。これが日本のハンセン病に対する現実です。いくら言葉でハンセン病なんか怖くない、理解している、わたしは支援者よと言っても、握手しようと言うとみんな手を引っ込めてしまいます。こういう人の心をわたしたちは結構見抜くのです。

ただ、わたしのクラスメート、ゼミの仲間にはただの 1 人もそんな人はいません。一緒に風呂に入るし、一緒に寝ます。わたしはどんなに慶應の学生仲間をみくびっていたのか、失礼だったか。彼らに対してわたしは逆のことをやっていたのです。たぶん彼らもそういう偏見を持ってしまふ人間だろうと、わたしは思っていたのです。でも、そうではありませんでした。そのことを皆さんには強く強く訴えておきたいと思います。学生時代はあつという間の 4 年間ですが、のちのち、ずっとのちになったら、この学生時代につくった友人は人生最高の宝だと思います。皆さんもぜひいいお友達をつくってください。

ここにおられる教職課程のみなさんが、みんながみんな先生になるとは思いませんが、いま日本の教育問題、子どもたちの問題は一番厄介です。教師というのはいま一番厄介な職業だとわたしは思っています。大学の先生もしかりですが、小、中、高校の先生たちはもっともっと大変です。もし皆さんが先生になるのだったら、今わたしが話したような、ハンセン病のようなことは絶対にあってはなりません。そういうことに目をつぶって知らんぷりをするのではなくて、むしろ積極的にかかわっていく。それが福澤先生の実学だろうと思うし、そういう教師であってほしいと思います。見たくないものに目をつぶるとか隠したがるというのが、日本人の心です。都合の悪いものはみんな隠そうとするのです。いまも政府は明らかにそういうことをしているのです。

われわれがつくったハンセン病資料館を、皆さん見に来てください。ここから 1 時間ちょっとで行ける東村山の全生園にあります。わたしがご案内します。そのハンセン病資料館が国立に移管されました。そうしたら、わたしたちがつくった資料館の内容がまるで変わってきてしまいました。国に都合の悪いものは隠そうとする動きがあきらかです。沖縄の集団自決の問題もいい例ではないでしょうか。あんな歴史はなかったとか、教科書から消そうとか、沖縄の人たちはみんな怒っています。いま日本はどういう方向に向かっているのか。そんな例を見るとわたしも黙っ

てられません。

近々、参議院選挙もありますが、そのへんもよく考えて投票して欲しいし、ここで選挙運動をするわけではないけれど、みなさんにはまず投票へ行ってくださいとお願いしたいです。若い人たちのなかには自分1人くらいが投票しなくてもいいじゃないかというような無関心な人が多いです。政治にも大いに関心を持ってください。また、こういう世間から隠れた部分で必死に生きている連中のことを少しは脳裏に入れて、自分の人生設計をたてていただきたいと思います。(拍手)

司会 森元さん、ありがとうございました。まだ若干お時間をいただいていますので、何か御質問や感想でもありましたら挙手していただければと思います。

ハンセン病に関する外国事情

学生 わたしがハンセン病について知ったきっかけは、外国へ行ったときに、患者の方が普通に生活していらっしゃるのを多く見かけたことでした。でも、日本ではあまり見かけません。世界では、ハンセン病に対する誤った考えや偏見をなくそうという方向に進んでいるのでしょうか。

森元 最初に紹介しておけばよかったのですが、慶應大学の看護医療学部にピースというエイズを扱うグループがあります。今日もこの場に、その人たちが何人か来てくれています。わたしは早稲田大学には何度も呼ばれているのに、なぜ慶應は呼んでくれないのかと思っていましたよ。早稲田には早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター、WAVOC というのがあって本格的にボランティア活動をやっています。今は特に、中国のほうで非常に厳しい生活を送っているハンセン病の人たちの面倒をみたり、治療や外科の手当てまでやったりしてくれています。慶應にはピースというグループがあって、ちょっと頑張ってくれている学生たちがいます。いま1人、卒業して中国のハンセン村で看護師さんとして頑張っている子もいます。ピースがあってわたしもちょっとほっとします。自分の母校にもこういう活動をしてきている学生が少なかったら、さびしいですね。でもピースは頑張ってくれています。今日もわざわざホームページでこの会の告知を見て来てくれたということです。わたしは予想もしていなかったけれど、大変うれしく思っています。

少し話が飛びましたが、世界には日本以外にもハンセン病に対してなかなかよくならなかったところがあります。それはなぜでしょうか。わたしはインドにも行っていますし、世界中、ハンセン病があるところで行っていない国はないぐらいです。それで言えるのは、外国でハンセン病に対する偏見や差別や誤解がなくなるのは、これが宗教との関係が厄介な病気だからです。

日本でも、仏教もキリスト教もらいという病に対してかなり誤解をしていました。1996年にらい予防法が廃止されて、ようやく日本のキリスト教では、聖書の中のらいは間違っていたと述べられるようになりました。旧約聖書には、らい病を天刑病だなどと書いていて、キリスト教では天からの刑罰の病ととらえていたわけです。仏教では業病と言いました。先祖が悪いことをしたから孫や曾孫が宿業的にこういう病気になる、そういう宿命的な病だということです。

なぜ偏見と差別をうけるようになったのか、その意味が意外と知られていません。らいというのは、薬のできる1943年までは不治の病だったのです。しかも、キリスト以前の古代エジプトの

手記にも出てくるということで、6000年、7000年前からあったと言われている病です。しかし、その病のとらえ方が非科学的で全く間違っていました。

例えば、「らい」という文字は「癩」と書きます。漢字は中国の偉い人が考えたのでしょうか。この病気になったら、重くなると自殺するか、自殺に失敗したら家を追い出され、ふるさとから追放されてみな乞食をやるようになります。昔は浮浪癩患者と言いました。全国を放浪して、時には四国の八十八カ所のお遍路さんになったりしました。『砂の器』という映画がありますが、親子で乞食をしながらあちこち回ります。人はこういう病気になると生きる希望は何もなくなり、みなさんの恵みがないと生きることができないので、どうかお恵みくださいと訴える。つまり、自分の病に頼って、自分の病を売り物にして生きてきたのです。これが「癩」患者なのです。昔は乞食患者と言いました。沖縄などではらい病のことを「乞者(コウサ)」と言います。乞う者です。奄美大島も同じです。

こういうふうに誤解と偏見をずっと背負わされてきた病でしたが、1943年にアメリカのカービルという国立療養所でプロミンという特效薬が初めて使われました。その時の患者たちが世界に向かって訴えたのです。『ザ・スター』という機関誌で、らいの時代はもう終わった、プロミンという特效薬ができて治るようになった、まさに奇蹟だと訴えました。患者の1人のおばあちゃんは『ミクラル・アット・カービル』という本を出しています。わたしは日本語に訳された本(ベティ・マーティン『カーヴィルの奇蹟』尾高京子訳、文藝春秋新社、1951年)を読んだことがあります。何千年も治らなかった病がプロミンという特效薬によって治るようになった、そのことは20世紀最大の神様のプレゼントだ、これを奇蹟と言わずに何と言おうか。こういう内容の本です。この本の中で、らい病という病名をやめてほしいと訴えて、今はハンセン病という名前になりました。しかし、ここに来るまでには何千年の歴史があったのです。

宗教上でいえば、天刑病、業病というのがもっとも誤った考え方です。わたしはインドのマザー・テレサのハンセン病センターを訪れてびっくりしました。そのヒンドゥー教の修道長がわたしに、ハンセン病をどのように扱っているかを教えてくれたのです。ヒンドゥー教ではハンセン病患者は悪魔にとりつかれた心の汚れた者だ。彼らが死んで、その骨をガンジス川に流せばガンジス川全体が汚れてしまうから骨を流すことはできない。心の汚れた者はあくまでも汚れた者だから、生前の罪をガンジス川に流すことは許されない。今でもそうだと言うのです。とんでもないことです。わたしは実際にネパールやインドの療養所へ行って、患者が死んだらどうするのかを聞きました。やはり、残念ながら川に流すことはできないので、そのへんのじめじめした地域に埋めてガンジス川に流したつもりにするというのです。向こうではじめじめしたところは全部聖なるガンジス川に繋がるという考え方ですから、そういうところに骨を埋めれば流したことになるというわけです。さびしいような、悲しいような、でもとんでもないことを今でもやっているのです。これがハンセン病の正しい対策を遅らせる最大の原因です。

2002年にブラジルでハンセン病学会が開かれて、わたしも参加しました。ブラジルでは文盲の人が結構多いことにびっくりしました。サッカー王国ブラジルでも、特にハンセン病の子どもたちやハンセン病患者を親に持つ子どもたちは学校へ行けないというのです。飲食費がないので朝飯も抜き、やせこけていて生活は厳しい。その子たちを世話している日系のドクター、日系の介護員さんたちがいます。日系の二世、三世で日本語のよくわからないような人たちがハンセン病に結構かかっているのです。わたしはうれしく思いました。

その方々がハンセン病学会に出席されたので、わたしは彼らと約3週間お付き合いをしてきました。彼らは人形劇を使ってテレビでハンセン病の宣伝をしています。その歌が日本語の歌なのです。「大きな栗の木の下で、あなたとわたし」と歌いながら、ハンセン病は怖くないよ、早く発見して早期治療をすれば後遺症も何も残らないで治りますよ、とテレビで流しているのです。みんなに、意味がわかって歌っているのか聞くと、日本語はほとんどできないから意味はわからないと答えます。でも、それをテーマソングにしているらしいのです。世界を見渡すと、まだまだハンセン病は大変です。

日本はどうかというと、2004年から日本にはハンセン病の患者は1人もいなくなりました。それまでは数名いたけれど、この年からはゼロです。ですからもちろん皆さんにハンセン病がうつる心配もないし、ハンセン病にかかる心配もありません。だけど、世界の状況はまだまだ大変です。

中国のハンセン病療養所を回ってきますと、ハンセン病のコロニーというか、回復者村がトータルで625もあります。日本には13しかありません。いくら人口が多い中国といっても600を超えるのは数が多過ぎます。だから、野放しにされています。ほとんど無医村で、看護師さんもいません。自分たちで自給自足しながら食べ物も貧しい、本当に厳しい生活をおくっています。そういう村に慶應の看護科を出た学生たちがボランティア活動で行ったりしています。さきほど紹介した1人の卒業生は、3年間アルバイトをして貯めたお金で、一銭の援助もなしに中国の回復者村で奉仕しています。

そのように外に目を向けて、関心を持って、行動を起こすことが大事です。行動を起こさなければ、いくら知ろうとしても、はっきり言ってそれだけのものです。知って、そのうえで自分がどうかかわっていくかが大事です。行動を伴わなければ何にもならないのはすべてのことに言えます。何か一つそういうふうにかかわっていけば、いろいろなことが見えてくるのではないかと思います。

わたしもハンセン病になって、最近、人生とは何だろうとよくよく考えます。ようやく70歳前後にして、こういうことが人間にとって大切なものかなと少し見えかけてきているような気がしています。それで、皆さんの前でちょっと生意気な話もさせてもらっています。

療養所の今後

学生 今日のお話、ありがとうございました。ハンセン病患者の方は長年、療養所にいらっしゃるといってお話でした。森元さんは自分の力で大学へ行って、社会に出て、活躍したという経歴をお話いただきました。ただ、らい予防法が廃止されて、これから社会での復帰を考えているという方もたくさんいると思います。その方たちに対して、社会復帰のための運動はあるのでしょうか。

森元 とてもいい質問だと思いますが、残念ながら、社会復帰できそうな人はここ数年でもうみんな療養所を出てしまいました。これから多磨全生園でも、どこの療養所でも、退院して頑張ろうと思っている人は皆無に近いと思います。高齢の方がほとんどだからです。いま全国の13の療養所に3000人弱いますが、その人たちの平均年齢は79歳です。しかも後遺症のかなり重い方々ですから、まず家族との関係はほとんど保たれていません。逆にそっとしておいてほしい、今さ

ら事を起こさないでほしいというのが家族の思いです。本人は本人で、療養所にいるのが一番幸せというか、療養所にいたほうが生活もいいのではないかと考えている人がほとんどです。だから、わたしたちが最後の社会復帰者と言えなくもないでしょう。裁判が終わってからこの10年で、多磨全生園から社会復帰したのは400人ぐらいいた中の10人ぐらいです。1割に満たないぐらいだから、退所するのは厳しいということですね。

それよりも、いま療養所の一番大きな問題は何かというと、療養所が将来どうなるかということです。わたしは療養所に戻る気はないので、先々はどこか地域社会の老人ホームに入ろうと思っています。しかし、いま療養所にいる方たちにとっては社会復帰しようという気持ちよりも、自分たちの最期の面倒をだれが見てくれるのかということが最大の関心事です。そこで今月21日、22日と、たぶんマスコミでも大きく報道されると思いますが、ハンセン病療養所の将来構想について大規模な集会があります。21日は池袋の豊島公会堂でしたか、大きな会場でやります。

でも、皆さんにいきなり療養所の将来構想といっても、あまりにもかけ離れた話だと思えます。今の質問に答える意味では、国として厚生省が裁判で負けたという事実を確認するほうがよいかもかもしれません。国は裁判で負けましたので、ハンセン病患者がたった1人になっても最期まで面倒を見ますと、われわれとはっきり約束しています。文書も交わしています。でも、今の国の動きは、皆さん御承知のとおり、国立病院や国立療養所を全部行政法人として独立させてしまって、国は面倒を見ないという方向に向かっていますよね。自分たちで儲けて、自分たちで経営を建て直せよということです。慶應病院などはもともと私立ですが、国立病院や国立療養所もそういう方向になってきています。しかし、唯一、ハンセン病療養所だけは独立行政法人になりません。なぜならば裁判で、国がやるべきことをやらなかったと負けてしまったから、この患者たちは最後の1人まで、皆さんの大切な税金で国が面倒を見るという会計上の約束になっています。

そういう状況の中で、他の病院は全部、独立行政法人として動いているのに、ハンセン病療養所だけ最後の1人まで面倒を見てもらえるかといったら、物理的にそれは無理です。患者が50人のところにドクターを5人張り付けるとか、看護師さんを20人張り付けるとか、そんなことはできません。口でこそ最後の1人まで面倒を見ると言っているが、国はさかんに療養所の統廃合に動き出しています。所長連盟というのがあって、そこでの研究はさせるけれども、例えば多磨全生園のような大きなところに草津とか駿河などの小さな療養所を持ってくるとか、あるいは九州は九州で大きなところにみな集めてとか、そういう動きがすでにあります。

わたしはこれには絶対反対です。1人でもふるさとから追われるのはいやなのです。50年も60年も過ごしてきた場所を離れ、いきなり鹿児島へ行け、熊本に行けと言われたって、だれだっていやです。年をとって、また自分のふるさとを追われるなんていうことは絶対に許してはいけません。では、どうしたらいいのでしょうか。ここが将来構想についての考えどころです。わたしなどは併設、つまり他の病気と一緒に療養所を利用するという考えを持っています。諸外国ではすでにそれをやっています。フィリピンとかタイとかを見てくると、日本よりずっと進んでいます。貧しい国なのに、なぜかそういう面でははるかに進歩的です。ハンセン病療養所の医療資源を一般の病気に開放しています。耳鼻科、眼科、歯科から、内科から、何もかも療養所にある科を一般地域社会の人が利用しています。だから、タイの療養所に行くと、ここは本当にハンセン病の療養所なのかと疑ってしまうくらいです。療養所の利用者のなかにハンセン病の人は少なく、20人に1人ぐらいです。他はみな健常者です。日本はなぜそういうふうにならないのか。

ならない理由が、いちおう三つあるというふうに全患協では言っています。その一つは、法律の壁です。らい予防法の廃止に関する法律の第2条に、療養所ではハンセン病以外の人の面倒は見ないとなっています。これをまずなくさなければなりません。この第2条がある以上、他の病気と一緒に療養所の医療資源を利用できません。ハンセン病問題基本法という法律をつくって、療養所を皆さん一般国民も利用できるようにしようというのが、この21日の大会の目的の一つです。

もう一つの壁は、偏見の壁です。社会が、ハンセン病と他の病気を一緒に療養所で扱うことなど認めたくない、という壁があります。

三つ目の壁はハンセン病患者自身の問題です。患者自身が他の患者と一緒にされるのを嫌だと思っていること。被害妄想的なものを結構持っていて、自分たちは自分たちだけ別に面倒を見てもらえたほうがいいという意識があります。だけど、これではこれからの世の中は通りません。その殻を破らないかぎり、ハンセン療養所に未来はありません。そういうふうな趣旨で集会をやる予定ですので、皆さんもし関心があれば参加してください。

再度、悲喜交々について

学生 お話を聞かせていただいて、ありがとうございます。今までたくさんの経験をされてきたと思いますが、その中で一番辛かったことと、うれしかったことは何ですか。わたしが教員になった時に生徒に伝えられればと思うので、よろしければ教えてください。

森元 辛かったことのなかには、家族から青酸カリを飲んで死んでくれと言われたこともあります。しかし家族のことは一方でわたしは許していたのです。家族から何を言われても仕方がない、受け流していようと思っていました。

それよりも一番しゃくにさわったのは、わたしが大学に入学する時にドクターから言われたことです。実は、わたしは慶應大学には6年目でやっと入ったのですが、その前の年に上智大学法学部に合格していました。わたしはカトリック信者なので上智大学は第一希望だったのですがその時に、やっと菌がなくなったのもうちょっと辛抱して治療したほうがいい、大学入学はまだ早いとドクターに言われて、1年間を棒に振ったのです。

次の年、慶應と上智を受けたら、両方とも受けました。そんな時に、君はハンセン病の回復者なのに大学に入って何をするのかと聞かれました。おかしいことを言うな、と思いました。なぜ今さらそんなことを言われるのかわからなくて、わたしは逆に、ハンセン病の人は大学へ行ってはいけないのですかと聞きました。彼は、いけないとは言わないけれど、ハンセン病で学問を積んで、末は博士か大臣にでもなるのかと言うのです。こんな失礼なことをよくドクターが言うものだ、わたしはまた言い返しました。

この先生は東大を出たエリートです。彼はわたしがハンセン病だから、大学なんて行っては困ると思っていたのでしょう。わたしは見抜いていましたが、実際にいろいろ言われてしまいました。わたしが大学へ行って、万が一大学生に病気をうつすようなことになってもいいのか、同じ苦しみを他の青年たちに与えていいのかというようなことです。その先生が検査をして無菌だということから、わたしは大学へ行こうと思ったのです。しかも先生たちは、赤ちゃんにしかうつらない、大人にはうつらないといつも言っています。なぜわたしが大学へ行くという時に、先生はこ

んなふうにしていやがらせをするのかと腹の虫が収まらなくて、そのドクターを無視して療養所を飛び出ていきました。もうそのドクターは天国へ行ってしまっています。森元、ざまあみろと思っているかもしれません。なぜなら、わたしは再発してひどい目に遭いましたから。そのドクターの言うことを聞かなかったからと言われればそうかもしれませんが、わたしはこのドクターを今でもドクターだと思っています。

ハンセン病患者でも勉強して、一人前の国民として生きていこうとする時に、病気が治ったら立派に頑張れよと励ましてくれるのが普通のドクターではないでしょうか。最初からやめたほうがいいというような話を彼がしたのは、療養所で一生暮らしたほうが希望を持たなくても幸せだと言いたかったのでしょうか。でも、うつらない病気なのにうつると嘘をつかれて、それはしゃくに触ったし、許しがたいと思っています。

うれしかったことはたくさんあります。この10年間は特にドラマチックだったと思いますが、なかでもやはり先ほどお話したことでしょうか。S君からおふくろに会ってくれと言われた時には、驚いて、信じられない思いでした。10日か2週間ぐらいしてから、別なクラスメートからも電話がありました。慶應高校からの塾生で、小さい時から慶應畑を歩んできた人です。彼は今は新橋のある焼鳥屋の社長で頑張っています。彼は、事業で次から次へと失敗して、債権者から追い回され北海道まで逃げていたこともあったそうです。その当時は生きた心地がしなかったけれど、わたしの本を読んだら、自分の苦労なんてわたしのとは比べものにならないと言います。わたしがハンセン病でこれほど大変な人生を歩んでいたというのを知らなかった、自分の焼鳥屋に1回飲みに来い、ゆっくり話をしようじゃないかと言ってくれます。S君から知らされて新聞記事を見て、彼もこの本を読んでもくれたのだと思います。

先ほどからお話ししているように、大学の4年間ののちのちになってわたしにとってどんなに大きな財産になったか、これは宝です。わたしの誇りと言っていいと思います。よき友に恵まれたことをわたしは慶應大学に感謝しています。それから、内池先生が教授冥利に尽きると言われた時は言葉にならないぐらいうれしかったし、あの日のことは一生涯忘れないでしょう。家族との絆を回復した時よりも、そちらのほうがはるかに大きな喜びでした。

それから、わたしを励ましてくれた方々ですね。その方々のおかげで今日のわたしがあるのです。完全なカミングアウトをした人はそんなにいません。3000人近い患者がいるけれど、身をもってこういう活動をしながら本名で生きている人は、ほとんどいないといっていいでしょう。回復者は東京近辺に大勢いますが、自分の奥さんにも子どもにも自分がハンセン病だったことを隠している人がおそらく7割から8割はいるのではないのでしょうか。彼らからすればわたしの活動に対して、ハンセン病のことはいい加減にしてくれと逆の心配をしているぐらいです。そういう現実もあります。しかし、それでもわたしにはわたしの道があります。わたしはわたしの使命でやっています。だれが何と言おうが自分の信念で生きていきたいと思っています。そうでないと、日本の部落の差別も、在日の差別も前進しません。いろいろな差別がありますが、在日や部落にしても何にしてもいわれなき差別です。日本人が勝手に決めつけた偏見による差別です。わたしたち当事者が言っていないかぎり、当事者が逃げ隠れていたのでは、こういう問題は前進しないというのがわたしの信念です。だれが何と言おうとマイペースで生きていこうと思っています。

そういった答えでよろしいでしょうか。今日は聴きに来ていただいて、ありがとうございます。

司会 今日本当にありがとうございました。「社会・他者との対話」という連続講演にふさわしいお話が聞けたかなと思っています。ハンセン病資料館の見学は、きっと企画をして告知させていただきたいと思います。もう1回森元さんに拍手をして、おしまいさせていただきたいと思います。(拍手)